

# 2020 年度城西短期大学英語教育活動

中島 直樹

## 1. はじめに

2021 年 1 月、城西短期大学において英語力調査が実施され、外国人留学生を除く日本人学生 94 名の短期大学ビジネス総合学科 1 年生が受験した。この調査は、毎年 4 月と 1 月の年 2 回の実施としているが、2020 年度は新型コロナウイルス感染拡大が続く中、前期・後期ともオンライン授業が実施されたため、4 月に実施することができず、今回は 1 月のみの実施となった。全員の受験とはならなかったが、全体の 4 分の 3 以上の学生が受験したため、参考値としては信頼できるデータであると思っている。また、2018 年度と 2019 年度の 2 年間については中島が海外勤務となったため実施できず、それ以前の結果との比較となる。

近年、短大を取り巻く環境が大きく変化し、それに伴い様々なタイプの学生が入学するようになった。短大入学生の英語力低下の傾向は年々顕著になり、特に優秀な学生の入学も以前に比べると少なくなった。それに加えて、ある程度基礎力のある学生とあまり基礎力のない学生との差が以前より大きくなったように感じられる。そのため、実際の授業に入る前に学生一人一人の英語力がどの程度であるかをあらかじめ認識しておくことがより必要になった。このような観点から、本学では新入生全員に対して毎年英語力調査を実施しており、その調査結果を基に、坂戸キャンパスの一年次の必修科目であるコミュニケーション基礎英語を能力別のクラス編成にし、これまで以上に授業の効率化と学生のレベルアップを図っている。

本論は、本年度学生の英語力調査の結果を、それ以前の学生の結果と比較することにより、本年度に入学した学生の英語力がこれまでの学生とどう違うのかということ明らかにしようとする試みである。本来ならば、一年後の 1 月の最終授業時に前回と全く同じ条件で同じ試験を実施して、どれだけスコアが伸びたかを調査し、本学学生の英語力の特徴を明らかにしたいところであったが、それは上記の理由で叶わなかった。今年度に限っては、僅かではあるが、持ち得るデータを駆使して、今年度新入生の英語力の新しい傾向を分析していきたい。

## 2. 過去の英語力調査の結果を振り返って

はじめに、2002（平成 14）年度の英語力調査から振り返ってみたい。2002 年度に英語力調査の問題を改訂し、それ以降、継続して現在まで同じ問題を使用しているため、年度ごとの比較

が可能となっている。出題形式は全問マークシート方式、試験時間は1時間、全50問で100点満点の試験であった。93名が受験し、全体の平均点は約56.9点であった。学科別の受験者数と平均点は表1の通りである。

表1 2002年度英語力調査結果（4月実施）

学 科	受験者数	平均点
経営情報実務	67名	約57.8点
現代文化	26名	約54.7点
全 体	93名	約56.9点

実際の得点分布を見てみると、かなり大きな広がりを持っていたことが分かる。90点以上のかなり基礎力のある学生が6名、次いで75点から89点までのある程度基礎力のある学生が10名、29点以下のほとんど基礎力のない学生が7名おり、その中間に30点から74点までの中間層があった。しかし、よく見るとその中間層の中にもいくつかの山があった。60点から74点までの上位の層（26名）と45点から59点までの中位の層（24名）と30点から44点までの下位の層（20名）とにおおよそ分類でき、この3つの層が2002年度の新入生に占める割合は実に75パーセントを超えていた。

次に、2003（平成15）年度の結果について見てみたい。59名の新入生全員が受験し、全体の平均点は約54.5点であった。学科別の受験者数と平均点は表2の通りである。

表2 2003年度英語力調査結果（4月実施）

学 科	受験者数	平均点
経営情報実務	47名	約55.0点
現代文化	12名	約52.6点
全 体	59名	約54.5点

前年度の英語力調査の平均点と比較すると、経営情報実務学科においては2.8点、現代文化学科においては2.1点、全体では2.4点下がった。また、この年度も経営情報実務学科の平均点の方が現代文化学科のそれより高い結果となった。

得点分布の形にもある程度の変化が見られた。前年度と違う点は、90点以上のかなり基礎力のある学生がひとりもいなくなった（前年度は6名）ことと、中間層の領域の形が逆転したことであった。30点から74点までの中間層にはいくつかの山があることが前年度の英語力調査で分かっていた。そして、前年度は60点から74点までの上位の層に26名、45点から59点までの中位の層に24名、30点から44点までの下位の層に20名の学生がいて、得点層が上位に

なればなるほどそれだけ学生数も多かったが、2003 年度は上位の層に 16 名、中位の層に 17 名、下位の層に 17 名と、中間よりやや下に比重が移っていた。

次に、2004（平成 16）年度の結果について検討したい。43 名の新生が入試を受験し、全体の平均点は約 50.5 点であった。学科別の受験者数と平均点は表 3 の通りである。

表 3 2004 年度英語力調査結果（4 月実施）

学 科	受験者数	平均点
経営情報実務	33 名	約 50.5 点
現 代 文 化	10 名	約 50.4 点
全 体	43 名	約 50.5 点

前年度の平均点と比較すると、経営情報実務学科においては 4.5 点、現代文化学科においては 2.2 点、全体では 4.0 点下がった。2002 年度から年々下降の一途をたどっていて、短大に入学してくる学生の英語基礎力が年々低下していたことを如実に示す結果となっていた。

全体の得点分布は基本的には前年度とそれほど変わっておらず、前年度をほぼ継承していた。90 点以上のかなり基礎力のある学生がひとりもいなくなったことも、中間層の形が逆転したことも前年度と同様であった。それに加えて、75 点から 89 点までのある程度基礎力のある学生が 5 名となり、前年より 3 名減少してしまった。中間層の中を詳しく見てみると、60 点から 74 点までの上位の層に 9 名、45 点から 59 点までの中位の層に 13 名、30 点から 44 点までの下位の層に 13 名の学生がいた。2002 年度には、得点層が上位になればなるほどそれだけ学生数も多かったが、2003 年度から中下位に比重が移り、その傾向は 2004 度も続いていた。

次に、2005（平成 17）年度の結果について検討したい。80 名が受験し、全体の平均点は約 56.5 点であった。学科別の受験者数と平均点は表 4 の通りである。

表 4 2005 年度英語力調査結果（4 月実施）

学 科	受験者数	平均点
経営情報実務	57 名	約 56.9 点
現 代 文 化	23 名	約 55.5 点
全 体	80 名	約 56.5 点

前年度の平均点と比較すると、経営情報実務学科においては 6.4 点、現代文化学科においては 5.1 点、短大全体では 6.0 点上昇した。改定前の問題で 2000（平成 12）年度から短大入学生の英語力調査のデータを採用しているが、前の年の平均点を上回ったのは初めてのことであった。2005 年度は、奨学金制度が充実していたため、高等学校の評定平均値 3.5 以上の学生が多く入

学し、基礎学力を持って入学した新入生たちが平均点を押し上げた。数値的に見て、2002年度の水準まで上昇した結果となった。全体の得点分布を見ても、短大全体では6.0点も平均点が上昇したので、まったく異なった形になった。90点以上のかなり基礎力のある学生はひとりもいなかったが、75点から89点までのある程度基礎力のある学生が19名おり、この層が本学を引っ張る牽引車的存在になっていた。受験者数が80名なので、約4人に1人がここに属していたことになり、この年度の躍進を支えた原動力のひとつになっていた。29点以下のほとんど基礎力のない学生が6名いたが、この割合は前年度とほぼ同じであった。30点から74点までの中間層は55名であった。この中間層の中を詳しく見てみると、60点から74点までの上位の層に18名、45点から59点までの中位の層に16名、30点から44点までの下位の層に21名の学生がいた。前年度は、得点層が下位になればなるほどそれだけ学生数も多かったが、2005年度はどの層にもほぼ均等に数が分布していた。2003年度から中下位に比重が移ってきていて、平均点を下げる最大の理由となっていたが、2005年度になってようやくその流れが変わった。

次に、2006（平成18）年度の結果について検討したい。82名が受験し、全体の平均点は約48.3点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表5である。

表5 2006年度英語力調査結果（4月実施）

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	82名	約48.3点

この年度に経営情報実務学科と現代文化学科が統合されてビジネス総合学科が誕生した。新学科になって初めての英語力調査であったが、前年度の平均点約56.5点から8.2点下落の約48.3点となった。前年度にいったん上昇に転じたが、2006年度にまた大きく下げた。上昇の流れがわずか一年で途絶えてしまった。

全体の得点分布を見てみると、受験者数は前年とほぼ同数であったにもかかわらず、形は前年とまったく違うものになっていた。前年はどの層にもほぼ均等に数が分布していた。基礎力のない学生もいたが、基礎力のある学生もほぼ同数いた。特に、前年は75点から89点までのある程度基礎力のある学生が19名もいて、この層が本学の全体的な底上げの役目を果たしていたが、2006年度はその層には6名しかいなかった。ピークは40～44点のところであり、16名が集中していた。29点以下のほとんど基礎力のない学生が9名いたが、この層に関しては、前年の6名と大差がなかったと考えてよいであろう。90点以上のかなり基礎力のある学生がひとりもいなかったことも前年と同様であった。中間層の上位の層には15名おり、前年の18名とほとんど変わりはない。しかし、中位の層は前年の16名から7名増の23名、下位の層は21名から8名増の29名となっており、中間層の中でもとりわけ中下位の増加が目についた。

つまり、75 点から 89 点までのある程度基礎力のある学生の層が減少した分がここに集まっていたのである。前年度は奨学金制度が充実していた年度であり、高校の評定平均値 3.5 以上の学生が多く入学し、ある程度基礎力のある学生の層の中核となっていたが、2006 年度は奨学金制度の廃止に伴い、その層が激減し、代わりに中間層の中下位の学生が増えた。これが平均点を 8.2 点下げた最大の原因であった。

次に、2007（平成 19）年度の結果について検討したい。受験者数 69 名、全体の平均点は約 51.0 点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表 6 である。

表 6 2007 年度英語力調査結果（4 月実施）

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	69 名	約 51.0 点

ビジネス総合学科になって 2 回目の英語力調査であったが、前年度の平均点約 48.3 点から 2.7 点上昇の約 51.0 点となった。前年度と比べ、平均点が若干上昇したため得点分布の形状にわずかな変化が見られたが、特に大きな変化ではなかった。得点のより低い層により多くの学生が集中するというそれまでの傾向を継承していたと言ってよいであろう。30 点から 74 点までの中間層を見てみると、60 点から 74 点までの上位の層に 12 人、45 点から 59 点までの中位の層に 18 人、30 点から 44 点までの下位の層に 22 人となっており、やはり基礎力のない学生の多さが目立った。75 点から 89 点までのある程度基礎力のある学生の層は、前年の 6 名から 11 名に増加していた。前年度のピークは 40～44 点のところであったが、2007 年度は 50～54 点に移動しており、これらが 2007 年度の英語力調査の明るい材料であった。

次に、2008（平成 20）年度の結果について検討したい。受験者数 81 名、全体の平均点は約 51.0 点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表 7 である。

表 7 2008 年度英語力調査結果（4 月実施）

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	81 名	約 51.0 点

受験者数は 12 名増加、平均点は前年とほぼ同じであった。だが、前年度と比べ、得点分布の形はわずかに異なっていた。ピークは 50～54 点と 40～44 点のところであり、いずれも 10 名。30 点から 74 点までの中間層を見てみると、60 点から 74 点までの上位の層に 15 人、45 点から 59 点までの中位の層に 23 人、30 点から 44 点までの下位の層に 22 人となっており、中位の層が下位の層を 1 名ではあるが上回った。得点のより低い層により多くの学生が集中しやすい傾向は変わっていなかったが、中位の層が増加したことはよい材料であった。85～89 点の層に 5

名、90点以上のかなり基礎力のある学生が2名いたことも喜ばしいことであったが、29点以下のほとんど基礎力のない学生が11名（前年は6名）おり、平均点が上がらない原因になっていた。かなりできる学生もいたが、それと同数のまったくできない学生もいて、平均すると前年並みであった。

次に、2009（平成21）年度の結果について検討したい。受験者数69名、全体の平均点は約46.0点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表8である。

表8 2009年度英語力調査結果（4月実施）

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	69名	約46.0点

受験者数は12名減少、平均点は前年と比べ5点マイナスであった。得点分布の形も当然異なっていた。前年度のピークは50～54点と40～44点のところ（いずれも10名）にあったが、2009年度は30～34点のところへ下がってきており、12名の学生がここにいた。また、第2のピークもその前後の40～44点と20～24点にあり、低得点層の膨らみが目立った。30点から74点までの中間層を見てみると、60点から74点までの上位の層に14名、45点から59点までの中位の層に14名、30点から44点までの下位の層に24名となっており、やはり下位の層の占める割合がかなり多かった。29点以下のほとんど基礎力のない学生も12名おり、前年と同様に、この層が平均点を大きく押し下げている。90点以上のかかなり基礎力のある学生が2名（内1名は留学経験者）いたことが唯一の明るい材料であった。

次に、2010（平成22）年度の結果について検討したい。受験者数81名、全体の平均点は約53.5点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表9である。

表9 2010年度英語力調査結果（4月実施）

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	81名	約53.5点

受験者数は12名増加、平均点は前年と比べ7.5点上昇であった。前年と比べて平均点が大きく上昇した年は過去には2005年度のみであったので、これが二度目ということになる。7.5点の上昇は2005年度の6.0点を上回っていた。2005年度は奨学金制度が充実し、多くの優秀な学生が入学して平均点が上昇した。しかし2010年度は2005年度のような奨学金制度はなかったが、大きく平均点が上昇した。その原動力となったのが3月の入試で入学した学生達であった。彼らのほとんどが城西大学やその他文系4年制大学の受験に失敗し、第二希望で短大に入学した。一度は受験勉強をやった実績と短大卒業後に編入したいという気持ちを持ち合わせた彼ら

が平均点を押し上げたのだと思う。これまでの短大入学生はいわゆる受験というものを経験しないで入学することが多かった。そのような状況の中で、2010年度は受験に失敗した者たちが新しい風を吹かせてくれた。得点分布の形を見てみると、前年度のピークは30～34点のところにあり、12名の学生がそこにいた。また、第2のピークもその前後の40～44点と20～24点にあり、低得点層の膨らみが目立っていた。それに対して、2010年度のピークは50～54点と40～44点のところへ上がってきていて、10名の学生がここにいた。第2のピークは下方30～34点のところ（前年度のピーク）に9名いたが、70～74点に7名、60～64点に6名、両ピーク間の45～49点に6名おり、前年の下膨れした形とは明らかに異なっていた。29点以下のほとんど基礎力のない学生は前年の12名から8名に減っていた。90点以上のかなり基礎力のある学生は4名おり、前年より2名増えていた。

次に、2011（平成23）年度の結果について見てみたい。57名が受験し、全体の平均点は約43.7点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表10である。

表10 2011年度英語力調査結果（4月実施）

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	57名	約43.7点

受験者数は24名減少、平均点は前年と比べ9.8点下落であった。受験者数は大幅減、平均点も調査を始めて以来過去最低、下げ幅も過去最大であった。前年に7.5点と大幅上昇し、2011年度が目ざされたが、このような残念な結果であった。過去に平均点が前年より大きく上昇した年度は2005年度と2010年度の二度であったが、いずれも翌年には大きく平均点を下げた。特に2011年度の下げ幅は大きく、2006年度の8.2点下落を上回っていた。2005年度は、奨学金制度が充実していた年度であり、多くの優秀な学生が入学して平均点が上昇した。また2010年度は、4年制大学の受験に失敗して短大第二希望で入学した学生たちが、短大卒業後に4年制大学に編入したいと強く思い、また受験勉強をした経験を活かして平均点を押し上げた。このように考えてみると、2005年度と2010年度の二年だけが例外なのであって、当時の短大入学者の英語基礎力は年々著しく下がっていたと言わざるをえない。

得点分布を見てみると、ピークは40～44点のところにあり、12名の学生がここにいた。第2のピークは50～54点のところに8名いたが、1名少ない7名の学生が20～24点のところにいて第3のピークを形成していた。90点以上のかなり基礎力のある学生はいなくなり、最高点は86点、次点は78点であった。グラフの形も以前の下膨れした形にもどってしまった。39点以下の学生が20名もおり、それが全体の35パーセント以上を占めるという散々な結果であった。

次に、2012（平成24）年度の結果について見てみたい。54名が受験し、全体の平均点は約

44.9点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表11である。

表11 2012年度英語力調査結果（4月実施）

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	54名	約44.9点

受験者数は3名減少、平均点は前年と比べ1.2点の上昇であった。前年の英語力調査で過去最低を記録し、2012年度の結果が目立たれたが、受験者数も平均点も前年とほぼ同じ結果となった。依然として短大始まって以来の過去最低水準であった。平均点が45点を下回った年は2011年と2012年の二年だけであり、いかにこの年の短大1・2年生に基礎学力が不足していたのかがよく分かる。得点分布の形を見てみると、前年度と同様ピークは40～44点のところであり、12名の学生がここにいた。30～34点に8名、50～54点に7名おり、これらが第2のピークを形成していた。第3のピークは65～69点と20～24点にあり、それぞれ6名の学生がいた。最高点は92点、次点は88点であり、その次はずっと下って74点であった。2002年以来、30点から74点までの層を中間層としてきたが、2012年度はその中間層以下が54名中52名を占め、かつてはある程度存在していたそれ以上の層がほぼ消滅してしまった。中間層の中を詳しく見ると、60点から74点までの上位の層に9名、45点から59点までの中位の層に13名、30点から44点までの下位の層に21名となっていて、やはり下位の層ほど人数が多くなっていた。29点以下のほとんど基礎力のない学生は9名、90点以上はかなり基礎力のある学生は1名であった。

次に、2013（平成25）年度の結果について見てみたい。51名が受験し、全体の平均点は約45.8点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表12である。

表12 2013年度英語力調査結果（4月実施）

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	51名	約45.8点

受験者数は3名減少、平均点は前年と比べ1.2点の上昇であった。過去二年続けて最低レベルに留まっていたが、受験者数も平均点も前年とほぼ同程度であった。これで三年連続45点前後というかつて経験したことのないほどの低い結果となった。得点分布の形を見てみると、ピークは40～44点と30～34点のところであり、それぞれ9名の学生がここにいた。第2のピークは55～59点にあり、7名の学生がいた。次いで、45～49点のところは6名、50～54点と35～39点のところはそれぞれ5名となっていた。30点から74点までの中間層を見てみると、60点



から 74 点までの上位の層が激減してわずか 3 名、45 点から 59 点までの中位の層に 18 名、30 点から 44 点までの下位の層に 23 名となっていて、2013 年度は特に中下位の比重が大きかった。中間層以下が 51 名中 48 名を占め、かつてはある程度存在していたそれ以上の層がほぼ消滅してしまったのは前年と同じであった。29 点以下のほとんど基礎力のない学生は 4 名（前年は 9 名）に減っていたが、中間層上位の層も減っていたことで相殺され、前年と同程度の平均点となっていた。2013 年度は中間層中下位に特に多くの学生が集中しているという傾向がよく見てとれた。90 点以上のかなり基礎力のある学生はひとりもいなかった。最高点は 88 点、次いで 82 点、80 点、70 点と続いていた。

次に、2014（平成 26）年度の結果について見てみたい。66 名が受験し、全体の平均点は約 55.7 点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表 13 である。

表 13 2014 年度英語力調査結果（4 月実施）

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	66 名	約 55.7 点

受験者数は 15 名増加、平均点は前年と比べ 9.9 点の上昇であった。過去三年続けて最低レベルに留まり、平均点 45 点前後という短大がかつて経験したことがない低レベルに悩まされていたが、ここで一気に跳ね上がった。10 点近い上昇というのは過去に例がなかった。なぜこのような結果になったのであろうか。得点分布を見てみると、ピークは 50～54 点のところであり、11 名の学生がここにいた。その前後の 55～59 点に 5 名、45～49 点に 6 名おり、大きな集団を形成していた。ピークが 10 点上がっていたことと、第 2 のピークがふたつあり、65～69 点と 30～34 点のところそれぞれ 8 名いたことが 2014 年度の特徴であった。前年までは、ピークより下位の層の人数が上位の層よりも多く、グラフの形が下膨れしていたが、2014 年度はそれが逆転していた。30 点から 74 点までの中間層を見てみても、60 点から 74 点までの上位の層に 13 名、45 点から 59 点までの中位の層に 22 名、30 点から 44 点までの下位の層に 12 名となっており、前年が上位の層がわずか 3 名、下位の層が 23 名だったことを考えると、ここに 2014 年度の躍進ぶりがうかがえた。29 点以下のほとんど基礎力のない学生は 6 名、90 点以上のかなり基礎力のある学生は 5 名であった。この年度には、一般入試（薬学部・理学部）の短大第二希望で入学した学生が 16 名（坂戸キャンパス 12 名、紀尾井町キャンパス 4 名）おり、もともと短大第一希望であった 50 名の学生との得点の比較をしてみた。短大第一希望者 50 名の平均点は 51.1 点であるのに対し、短大第二希望 16 名のそれは 70.3 点とずば抜けて高かった。90 点以上の 5 名（内、紀尾井町キャンパス 1 名）はすべて第二希望者であった。このことから分かったことは、2014 年度のもともとの短大希望の学生のレベルはここ数年の中では一番高く、更に

レベルの高い短大第二希望者を加えて全体で前年より平均点 10 点の伸びになったということであった。短大第二希望者がレベルを引き上げた例は 2010 年度にもあったが、当時は文系学部不合格の学生たちであり、数値的に見ても 2014 年度ほどの衝撃ではなかった。薬学部・理学部を不合格になったとはいえ、受験勉強を経験してきたということがこれほど基礎力確認テストの得点の差なって表れるのかということをも改めて実感させられる結果であった。

次に、2015（平成 27）年度の結果について見てみたい。65 名が受験し、全体の平均点は約 48.0 点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表 14 である。

表 14 2015 年度英語力調査結果（4 月実施）

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	65 名	約 48.0 点

受験者数は 1 名減、平均点は前年と比べ 7.7 点の下落であった。前年に 10 点近く上昇したので期待されたが、残念ながら大幅に下がってしまった。大きく上昇した翌年は必ず大きく下降するのはなぜであろうか。得点分布を見てみると、ピークは前年と比較して 20 点下がり、30～34 点のところに 12 名の学生がいた。第 2 のピークは 50～54 点（前年のピーク）のところにあり、10 名となっていた。このふたつの山だけで 2015 年度のレベルが想像できるが、更に詳しく中間層も見てみたい。30 点から 74 点までの中間層を見てみると、60 点から 74 点までの上位の層に 15 名、45 点から 59 点までの中位の層に 18 名、30 点から 44 点までの下位の層に 19 名となっており、やはり中下位層の膨らみが目立った。前年が上位の層に 13 名、中位の層に 22 名、下位の層に 12 名だったことを考えると、下位の層の 19 名、特に 30～34 点のピークにいる 12 名が平均点を押し下げていることが分かる。29 点以下のほとんど基礎力のない学生は前年より 3 名増えて 9 名、90 点以上はかなり基礎力のある学生はゼロ（前年は 5 名）であった。80 点以上も 3 名しかおらず、最高点は 88 点（紀尾井町キャンパス）、次いで 82 点が 2 名であった。

次に、2016（平成 28）年度の結果について見てみたい。55 名が受験し、全体の平均点は約 49.4 点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表 15 である。

表 15 2016 年度英語力調査結果（4 月実施）

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	55 名	約 49.4 点

受験者数は 10 名減、平均点は前年と比べ 1.4 点の上昇であった。前回は 7.7 点の下落であったので、やや不安があったが、前年とほぼ同程度の水準となった。得点分布を見てみると、ピークは前年と比較して 5 点上がり、35～39 点のところに 8 名の学生がいた。第 2 のピークはふた

つあり、一つ目はピークのすぐ上の 40～44 点のところに 7 名の学生がいて、ピークと合わせて大きな集団を形成していた。もうひとつの第 2 のピークは 50～54 点のところにあり、同じく 7 名となっていた。30 点から 74 点までの中間層を詳しく見てみると、60 点から 74 点までの上位の層に 8 名、45 点から 59 点までの中位の層に 15 名、30 点から 44 点までの下位の層に 19 名となっており、やはり中下位層の膨らみが目立った。ピークと第 2 のピークを含む下位の層の 19 名が大きく平均点を押し下げていることが分かる。2016 年度の特徴は、80 点以上の学生が、坂戸キャンパスに 5 名、紀尾井町キャンパスに 1 名の計 6 名（前年は 3 名）いたことであるが、29 点以下のほとんど基礎力のない学生が 7 名おり、相殺される結果となっていた。最高点は 96 点（2 名）、次いで 90 点、紀尾井町キャンパスの最高点は 88 点であった。坂戸キャンパスの平均点は 49.3 点、紀尾井町キャンパスの平均点は 49.8 点となっていた。

最後に、2017（平成 29）年度の結果について見てみたい。74 名が受験し、全体の平均点は約 50.3 点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表 16 である。

表 16 2017 年度英語力調査結果（4 月実施）

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	74 名	約 50.3 点

受験者数は 19 名増、平均点は前年と比べ 0.9 点の上昇であった。2017 年度は日本人学生の数が増加したので期待していたが、前年とほぼ同程度の水準となった。得点分布のピークは 40～44 点のところにあり、10 名の学生がここにいた。前年度のピークは 35～39 点であったので、5 点上昇していた。第 2 のピークは 3 つあり、一つ目は、ピークのすぐ下、前年のピークの 35～39 点のところに 7 名、二つ目は、そのすぐ下の 30～34 点のところに 7 名となっており、ピークを含めたこの 3 つが大きな集団を形成していた。3 つ目は 55～59 点のところに同様に 7 名となっていた。30 点から 74 点までの中間層の中の上位の層（60 点～74 点）と中位の層（45 点～59 点）と下位の層（30 点～44 点）を詳しく見てみると、上位の層は 11 名、中位の層は 18 名、下位の層は 24 名となっており、下の層に行けば行くほど数が多くなり、グラフの形も下膨れしたものになっていた。75 点から 89 点までのある程度基礎力のある学生の層は 9 名おり、90 点以上のかなり基礎力のある学生 2 名を加えて 11 名の本学のトップ集団を形成していたが、29 点以下のほとんど基礎力のない学生が 10 名おり、相殺される結果となっていたのは前年と同じ傾向であった。坂戸キャンパスの平均点は 50.9 点、紀尾井町キャンパスの平均点は 49.1 点となっていた。最高点は 90 点が 2 名で、坂戸に 1 名、紀尾井町に 1 名となっていた。

### 3. 今年度の結果について

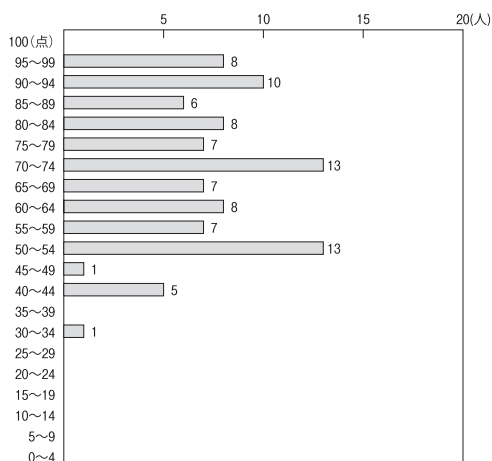
これまで、2002年度から2017年度までの結果を見てきたが、2018年度と2019年度については、中島がUC Riverside Resident Directorとして米国に派遣されたために試験が実施できず、この2年間についてはデータがない。今年4月に2年ぶりに再開する予定であったが、冒頭で述べた通り、新型コロナウイルス感染拡大のため、前期においては授業開始が5月に遅れ、またオンデマンド型のオンライン授業が実施されたため前期には実施できなかった。後期においても必修科目であるコミュニケーション基礎英語についてはオンライン授業が継続されたが、Zoomによるリアルタイム形式の授業に変更されたため、1月にはどうにか実施することができた。しかしながら、依然として対面ではなくオンライン形式であったため、WebClassでのオンライン試験とせざるを得なかった。出題形式はこれまでと同様に全問マークシート方式、試験時間は1時間、全50問で100点満点の試験とした。これまでと違う点は、対面試験ではなくWebClassを利用したオンライン試験であること、受験者数は全体の4分の3程度であること、1月実施の年1回であることの3点である。今回は、外国人留学生を除く94名が受験し、全体の平均点は約71.1点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表17である。

表17 2020年度英語力調査結果（1月実施：WebClass）

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	94名	約71.1点

単純に2017年4月実施の結果と比較すると、受験者数は20名増、平均点は20.8点の上昇となる。まずは得点分布グラフを見てみたい。

2020年度英語力調査結果得点分布グラフ（1月実施）



今年度は1月のみの実施であったので、ここでは前回2018年1月に実施した2017年度第2回の結果を比較対象とする。2017年度第2回（1月）は70名が受験し、平均点は52.3点、最高点は90点（1名）、最低点は14点（1名）であった。同年度第1回目より2.0点の上昇であった。30点から74点までの中間層の中の上位の層（60点～74点）と中位の層（45点～59点）と下位の層（30点～44点）を見てみると、上位の層は12名、中位の層は17名、下位の層は22名となっていた。75点から89点までのある程度基礎力のある学生の層は10名、90点以上のかかなり基礎力のある学生は1名、29点以下のほとんど基礎力のない学生は8名であった。これと比べて今年度はどうであろうか。まず驚かされるのは、71.1点という平均点の高さである。ここまでの高い平均点は過去に例がない。2017年度第2回の平均点52.3点から18.8点の上昇となっている。次に得点分布グラフを見てみると、ピークはふた山あり、70～74点と50～54点のところにそれぞれ13名の学生がいる。70点台のピークというのも非常に高いレベルとなっている。中間層に目を向けると、中間層上位の層に28人、中位の層に21人、下位の層に6名となっており、上に行けば行くほど人数が増える理想的な形となっている。さらに、75点から89点までのある程度基礎力のある学生の層は21名、90点以上のかかなり基礎力のある学生は18名、29点以下のほとんど基礎力のない学生はゼロであった。グラフも今までに見たことがない程上位に得点が集中する形になっており、94名中87名が50点以上で、50点以下は7名のみとなっている。これまでとは試験のやり方そのものが違うため単純に比較することには無理があると思われるが、それでもやはりこの得点差には驚かされしまった。

#### 4. 12月実施のTOEIC® Listening & Reading IP テストの結果について

今年度も、12月に本学で実施された第1回TOEIC® Listening & Reading IP テストを受験するように指導し、短大1年生4名が受験した。全学との比較は表18の通りである。

表18 第1回TOEIC® Listening & Reading IP テスト結果

学 科	受験者数	平均点
短 大	4名	356.2点
全学(短大含む)	102名	384.9点

今年度は、新型コロナウイルス感染拡大の影響で受験者数が少なく、短大を含む全学で102名が受験し、平均点は384.9点であった。2017年度の全学平均点は304.4点、2016年度は286.3点であったので、全学的に英語の学力が上がっているのが分かる。短大の平均点は356.2点であり、2017年度の249.0点、2016年度の237.6点から大きく上昇している。短大1年生の最高

点は465点、300点以上の学生は3名であった。

## 5. おわりに

最後にもう一度、全体の調査結果を振り返り、今後の英語教育の指導について考えてみたい。2002（平成14）年度から4月実施時の平均点の推移を見てみると、2002年度：56.9点、2003年度：54.5点、2004年度：50.5点と年々下降の一途をたどり、2005年度に56.5点といった上昇に転じた。しかし2006年度に48.3点と大きく下げ、2007年度：51.0点、2008年度も51.0点と戻したが、2009年度は46.0点と下げた。2010年度は53.5点と大きく上昇したが、2011年度は43.7点と過去最低を記録し、2012年度：44.9点、2013年度：45.8点と3年連続で45点前後の低水準で推移した。2014年度に55.7点と10点近く上昇したが、2015年度に48.0点と7.7点下落し、2016年度は49.4点、2017年度は50.3点であった。2018年度と2019年度のデータはなく、オンラインで実施した2020年度1月は71.1点と驚異的に上昇した。今年度の上昇については、オンライン実施であったという理由が推測されるが、そうとばかりは言えないかもしれない。データがなかった2年間で短大入学生の学力が向上していたということも十分に考えられる。12月に実施されたTOEIC® Listening & Reading IPテストの結果を見ても、それを裏付ける結果が出ているので、短大を含めた大学全体の基礎学力が上がっているのかもしれない。現段階ではあくまで推測の域を出ないので、来年度の対面試験の結果を待ってから再度考察したいと思っている。

今年度は新型コロナウイルス感染拡大により、授業の開始が遅れたうえに対面授業が実施できず、年間を通してオンライン授業となった。最初はなかなか慣れず、オンデマンドでの授業動画作成・配信とWebClassでの学生管理に苦労した。学生の顔を見ることができなかったので、授業をする方とされる方の双方が不安を感じていたが、後期になってZoomによる授業が開始されると、それもだいぶ払拭された。Zoomを利用することにより、通常の授業をリアルタイムでそのままスクリーンを通して行うことができ、より対面授業に近い形となった。学生と教員の双方向的なやり取り、ペアワークでの学生同士の交流もスムーズに行われ、オンライン授業の良い点も再確認することができた。来年度は対面授業が再開される予定であるが、今回学んだオンラインの利点を今後の対面授業に活かしていきたいと考えている。